

第

三

編

中
西
敬
二
郎

中西敬二郎（なかにし けいにろう）

明治三十五年大阪市に生れる

大正十五年早稲田大学文学部卒業

直ちに中等教育に携わり、後各会社の重役歴任

母校に迎えられ「早稲田大学八十年誌」執筆

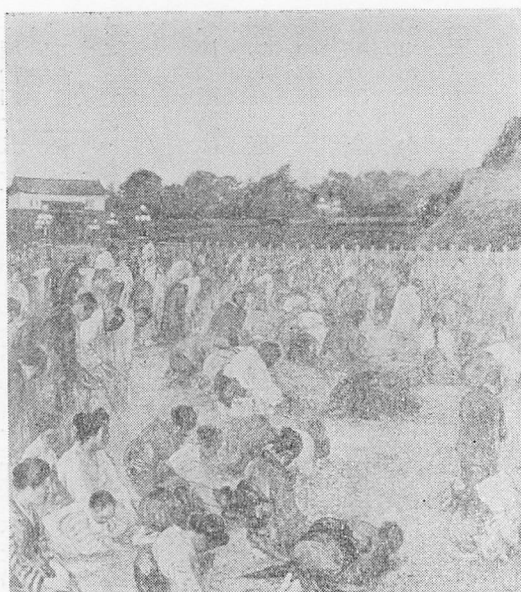
早稲田大学史編集所嘱託

著書「人形は生きている」「文楽への道」

第一章 明治から大正へ

一 明治の挽歌

明治四十五年七月三十日午前〇時四十三分。不世出の聖天子はついに神去りました。六千万国民の祈りも虚しく、これより先の二十日に、突如として官報号外を以って天皇御不例の趣きが発表された。慢性腎臓炎、糖尿病と云うことであつたが、御容態は相当御重態のようである。新聞の号外で此の由を知った国民は、ひと齊しく天皇の御回復を祈念した。そもそのむかしから、天皇と国民との関係は親子のまじわりであると云う。天皇が国民をせきし赤子と呼べば、国民は天皇を御親みおやと慕あいたがらう間柄である。殊に明治維新の大業を為した天皇は、四姓を撤廃して、士農工商を平等にした。庶民は自由平等の恩恵に浴したのである。云わば名実共に天皇の赤子となつたのである。その子等が御親の御病氣回復を願うのは、誠信まことこうと云わずとも当然のことである。だからこそ、憂色に閉ひたすされた国民のうちで志あるものは、全国の都鄙村落から上京し、二重橋前の玉砂利の上に土下座し、額ひたいを土に埋めて只単回復祈願をしたものである。かような風景は、外人に取って実に稀有まれなことであつたもののようで、二十七日の「東京朝日新聞」は「天皇神観の発露——二重橋畔に立ちて外人の驚異」と題し左の一文を掲げている。



皇居前にご平癒を祈る群衆 田辺至作「不豫」(明治神宮
絵画館蔵)

△昨今外人の話題

実にや今日此頃彼等の間の談話は、一として陛下の御大患に互らざるなし。試みに昨今二重橋外に至りて、遙かに皇城を伏し拝みつつある老若を眺むれば、其中に幾多外人の雑り居て、此様をば写真機に収めて立去る杯を見ること珍らしからず。思ふに之をば家苞と為し日本人の忠誠斯くぞと許り語草にせん為なるべし。

また二十六日の「ジャバン・アドヴァタイザー」は「二様の君主」と題して、英国の英蘭王及びわが天皇に対する忠誠を比較し、前者はこれを国民が国

王に感ずる友情と見、後者は天皇の神性に対する崇敬とし、そこに日本国民の忠誠があると見ている。

いづれにしても幼にして帝位を即ぎ、十年を一期として相次いで起った、台湾征討(七年)、京城甲申事変(十七年)、日清戦争(二十七年)、日露戦争(三十七年)の国難を克服し、版図を拡げて国威を海外に宣揚したのが天皇であった。鎖国の扉を開き、門戸を開放し、近世史を一八〇度に転回したのも天皇であった。海外から物質文明を取り入れ、精神文明を吸収してわが国古来の文化と融合させたのもこの天皇であった。国民が讃仰し、崇敬する

のも無理からぬものがあると言えよう。だからこそいつまでも生き存らえて貰いたかった。そのためには一日も早く御回復の朗報が聞きたかったのである。ああ然し天は非情であった。天帝は日継御子と雖も徳齡を延べなかった。六千万国民の号泣の中に、天皇の御靈は昇天して逝ったのである。

天皇の仮の御名は大行天皇と申し上げた。これは諡号が追贈されるまでかくお呼びするのが慣例とされていたからであった。そこで八月二十七日改めておくり名が贈られた。すなわち明治天皇である。

かくて世は大正に移った。

皇太子嘉仁親王は即日踐祚して皇位を即いだ。皇位は仮初にも須臾すべきでなかったからである。先に明治大帝が皇位を継承された時、年号は一世一代と定められた。即ちその時の詔勅に

今般御即位御大礼被為濟先例之通被為改年号候就而ハ是迄吉凶ノ象兆ニ随ヒ屢改号有之候得共自今

御一代一号ニ被定候依之改慶応四年可為明治元年旨被仰出候事（太政官日誌八十一「慶応四年九月八日御布

告写」）

と明示されている。已にこの文中にもある通り是迄吉凶の有る毎に改元された。例えば明治天皇の父君である孝明天皇の御代には、その治世二十三年間に、弘化、嘉永、安政、万延、文久、元治、慶応と七回に涉って改号されており、年間の長いものでは、嘉永、安政のそれぞれ六年、短いものでは、万延、元治のそれぞれ一年で、平均三・三年を出でなかった。送迎に遑なく奔命に疲れ、少々頭の悪いものは、ようやく新号を憶えた時、また改正年号を

憶えなければならぬと云う有様であった。そこで此の煩雜さをなくするために明治天皇が採られた政策であったのだから、新帝がこれを改正される理由はどこにもなかったのだと、七月三十日午後枢密顧問の諮詢を経て『大正』と改元されたのである。その出典は「公羊伝」中の「君子大居正」と「易経」の「大亨以正天之道也」に拠ることは云うまでもないだろう。

踐祚式は即日執り行われる慣例であったが、即位の大礼は必ずしもそうではなかった。新帝の治世の初期には、第一次世界大戦参加というような大事件があったから、挙式が延期されたのも無理はなく、事実三年後の大正四年十一月に京都の紫宸殿で執り行われた。然し大葬はそう延ばすわけにはいかなかった。即ち御陵の造営、御大葬所の建設等があるにせよ、準備期間は最短一か月半位が限度であった。これに対し高職貴顕の参列者の服装の準備も一苦労であった。大礼服や正装を持っている者はいいとして、特に一般の中から選ばれて、此の一代の盛儀に参加するものは、先ず服装の調製から始めなければならなかった。

わが丸善は逸早くここに眼をつけたのである。とはいっても慶応の学生が大いに得意がって天氣のいい日でも腕や肩に掛けて歩いた雨外套のバーベリー・コートを取扱ったのが大正三年以降であったから、大礼服の受注などとは思ってもよらなかった。それでも帽子の取扱いは相当の自信を持っていたようで、「逸早く」と断って、次の如くシルクハットの広告を出したのである。

シルク・ハットとハット・ケース



シルクハットとハットケース

群集の為に隠るるものはズボンと靴のみ、礼帽は儼として頭上に在り、衆人の視線は悉く礼帽に聚まることを決して忘るべからず、空前の盛儀に列して、礼帽らしくも無き礼帽を戴くことあらば、大官紳士の面目に關すること無きや。スコット製礼帽は久しく天下一品と称せらる、其地質、色沢、体裁は自ら特殊の光彩を放ち、群鷄中の孤鶴とは児童か目にも映ずべし。

英国倫敦 スコット会社製 シルク・ハット 金拾七円五拾錢 金式拾壹円

ハット・ケース 極上牛革製 舶来金具付 特製 金五円五拾錢 金拾円五拾錢

此の広告文の書出し「群集の為に隠るるものは……云々」と云う奇想天外の名文は、内田魯庵の作で、当時内田は「学鐙」の編纂にあたり、殆んど独りで広告文を書きなぐっていた。

ところで四十日前後と云う短期間に、英国倫敦のスコット会社から、帽子を取り寄せようとするのには余程の自信があったに相違ない。と云うのは、當時は今日のように航空路が開けず、わが国では明治四十三年十二月十四日、日野熊蔵陸軍大尉がはじめて試験飛行に成功した位で、そのころ東亜と欧州とを結ぶ道は、南支那海↓印度洋↓地中海を利用する海上交通と、明治三十五年一月に開通したシベリヤ鉄道による二本の路線に限られていた。しかし前者を利用するのでは、実に四十日間の日数がかかり、注文を受取って帽子が到着した頃には已に大葬が終っていることになるから、此の路を利用する

のは不可能に近かった。だとすれば後者による以外に手段がないわけである。これなればシベリヤ横断二週間、モスクワからベルリン經由してロンドンまでは四日間であるから、どうやら受注には間に合う。帽子のサイズも異なり、桂太郎のようにズバ抜けて大頭のものもいたことだから、予め幾種類かを取揃えておくのは冒険であつたので、当然シベリヤ鉄道を利用する方法がとられた。然しこれとても、途中でどんな事故に遭遇するかわからないので、その点矢張冒険の域を脱しないが、その危険を敢て冒した商魂のたくましさは今更ながら驚嘆せざるを得ないのである。

二 香料の話

その年の夏は、いつにも増して暑さがきびしかった。

東京中央測候所の報告によると、八月の平均気温は三〇・八度であると云う。

暑さがきびしくなると、汗臭かんろうを含んだ一種異様な体臭たいきゅうが発散され勝ちである。そういう時、一滴の香水は自他共に気分を爽快にしてくれる。魯庵の言葉をかりると、

外国の小説によくある、当流の気の利いた紳士が通りすぎるとオードコロンの香がブーンと薫するといふ形容がある。(略)之から梅雨のジメ／＼した時候などにはオードコロンの香がからだに匂ふと何となく気分が快活になる――

と云うのである。魯庵の文は男の香水を推奨しているが、何も男に限ったものではない。否むしろ女性の方が匂い

止めのために利用する機会が多い。ところで丸善が香水の輸入を始めたのは非常に古く、唐物店（とうぶつ）を開設した草創当時に由来するが、それから数えて四十年後の此の頃に至ってはその種類も非常に多くなっている。今その種類を挙げて見ると次の通りである。

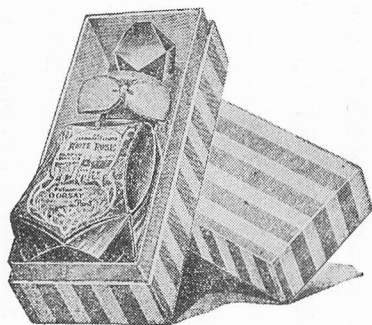
単位円

品名	原名	会社名	売価	換算
キセロル		Xerol	・八五	一、一二二
ヴワキオレット	Violet		三・五〇	四、六二〇
ヴワキオレット		Roger et Gallet	一・三五	一、七八二
ロジャ・ガレー	Indian A. E. Telesie		二・〇〇	二、六四〇
インデヤン・エー・イー・テレスィヤー	Splendeur	Pinaud	一・四五	一、九一四
スブレンダー	White Rose Violet		二・二五	二、九七〇
ビノー	White Rose Violet	Colgate	一・四五	一、九一四
ホワイト・ローズ・ヴワキオレット	White Rose Violet	D'orsay	一・八五	二、四四二
ホワイト・ローズ・ヴワキオレット	White Rose Violet		四・〇〇	五、二八〇
コルゲート	Casimir Bouquet		四・八〇	六、三三六
カシメヤブーケ	Rose Française		五・二五	六、九三〇
ドルセー	Heliotrope		六・〇〇	七、九二〇
ローズフランス・ヘリオトロープ	Violet			
ヘリオトロープ	Chevalier			
ヴワキオレット	Relief			
チェバラー				
レリーフ				

ジャスミン	Jasmin	Houbigant	九・七五	一二、八七〇
セレネタ	Serenata		一三・五〇	一七、八二〇
チャーム	Charm		一三・五〇	一七、八二〇
ウビガン	Aura les yoles		二・二五	二、九七〇
オーラリヨルス	Essence of Extrait		二・三〇	三、〇三六
エツセンス	Hausser Royale		二・五〇	三、三〇〇
ホジャローヤル	Cyclamen		五・〇〇	六、六〇〇
シクラメン				

此の表で、いささか注を加えなければならないのは下段の換算の欄の数字である。これは明治四十五年の物価を一とした場合、昭和四十四年の物価は実にその一、三二〇倍に当たっているから、参考のため当時の販売価格を現在に換算したものである。然し若し米価が物価の基準となるものであるとすれば、此の指数は凡そその半分に相当するものと見てよい。明治大帝の崩御により、米価は暴落し、東京市場の相場を大きく変動させたが、七月二日には一升三十二銭の高値を呼んでいた。従って現在の消費者価格を升到換算した二百三十六円六十銭は約七二〇倍に相当するわけである。現在前記の品の大半が、丸善の店頭から影をひそめてしまったので、これと対比する由もないが、それにしても紳士淑女がエチケットを守るのは、仲々生やさしいものではない。然しそれが高価であるのは、それなりに理由がある。

元来、香水とは仏前に捧げる聖別された水、即ち^あ闕^か伽を云うのである。そもそも人間が香料を使用するようにな



香水瓶（ドルセイ社の香水ホワイト・ローズ）

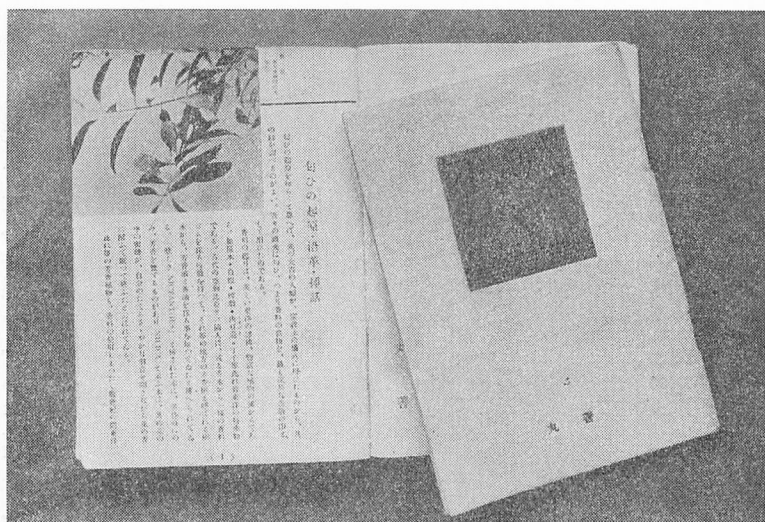
った起源をたずねると、凡て宗教的儀式に関係ありと見てよい。古くはエジプトに於けるミイラの製法もそれで、死者の靈魂カーは一時肉体を離れるが、オシリスの裁きを受けたのち、再び元の肉体に帰って来る。そのような時、靈魂の住家が腐敗してはどうにもならないので、肉体の保存が考えられ、香油を以てそれを聖別し麻布を幾重にも巻きつけたものである。こんな例は必ずしもエジプトだけに限られたものではなく、中国の古書である「暇耕録」にも、「俗曰ニ蜜人、蕃曰ニ木乃伊」と云い、その風習があったことを物語っている。ヘブライ語でミイラは没薬のことを指し、ミイラは没薬を塗った人を意味する。キリスト降誕の時、東方の三博士が乳香、没薬、黄金を捧げてこれを祝福した話は、余りにも有名であり、ヨセフはキリストの死骸を葬る時、高価な香料を塗布したとも伝えられている。またギリシヤ語で「埋葬式をする」と云う動詞が「香を塗る」と云う言葉で代表される場合もあるが、これはギリシヤでもこうした慣習があった証拠である。英国のエリザベス女王が特に香りに対してデリケートで、洗練された感覚の持主であったのは、オクスフォード伯エドワードの影響を受けたからであろう。彼はイタリーから帰還した時、四ツのリボンと絹の色糸でバラの花を刺繡した香入りの手袋を女王に献上したが、これがいたく女王を喜ばせ、その後永く「オクスフォード伯の香料」(The Perfume of the Count of Oxford)と云う言葉が英国人の間に伝えられた。エリザベス女王は独特の動物性香氣を持ったスペイン革の衣服を愛用したと云い、今日でも「イスパニヤの

香水」(Odorant d'Espagnole)と云う、重厚な動物性の香水が販売されている。フランス人は「男も女もみなバラ香水のついた帽子を冠ってゐた」のは余りにも有名である。またイタリアのフランデバニ(Frangipani)が考案した数種の動物性香油に菖蒲の香油を配合した香入りの手袋は、侯伯や軍人に愛用されたと云う。わが国でも「太功記十段目尼ヶ崎の段」では、重次郎が出陣する時、兜に香を焚き込めているのは、武士のたしなみを伝えたものであるが、香料の特殊な用途を物語っている。

香料は宗教的儀式に用うる以外に、遊戯にも用いられた。その尤なるものはわが国の聞香きんかうまたは香合かうあわせである。推古朝三年に沈香が渡来して以後、中国から蘭奢待らんじやたいなどの伽羅きゃらが伝来し平安朝以後名香を聞き分ける遊戯が始まった。その故郷の中国は、世界有数の動物性芳香原料の生産地であつたから、国民もまた非常に多くこれを消費した。即ち単に祝典に香木を焚き、香脂を燻くわんずるばかりでなく、家庭にも遊びにも料理にまで香を入れた。殊に此の国民が珍重したのは媚薬類で、竜涎香りゆうぜんかう、麝香じやくかう、阿片を混じた大麻の花などを特殊な秘法で混淆して用いた。

此の他香料の特効として体臭を消す作用がある。体臭は元来本能的なもので、外敵の防禦と、異性を誘引するものである。後者は云うまでもなく女性の武器で、ラテン族に多く、特にフランスやスペインにその傾向が強い。フランスで数種のよい匂いの香料が発明され、製造販売されているのも故なきではない。資本主義を拒否するソ連でも、人間の好悪の問題は如何ともすべからず、スターリンの娘であるスベトラナが最近発表した「回想録」のうちに、次のような興味ある記事が書かれている。

……ときおり彼(兄)は、女性ならだれでも喜びそうな洋服や高級香水などを母に送ってよこした。当時はみ



「匂ひの話」

なが禁欲者ふうの生活を送っていてこんな品物のことは殆んど念頭にも浮ばなかった。それに父は、「舶来の贅沢品」に対しては潔癖そのもので、香水の匂いさえ我慢できないほうだった。女性はずがすがしい清潔な香りさえしていれればいい、というのが父の持論だった。……そんなわけで母は、こうした贈りものにもおおびらで喜ぶわけにはいかなかった。それでも、香水はやはり用いられて、わたしの子どものころの記憶のなかで、その香りは母のおもかげと切りはなせないものになっている。母の身体からも、母の手からも、なんとも言えぬよい香りがたちこめていたものだった……晩方、もうわたしが床についてから、母はときおりわたしの部屋をたずねてきて、わたしの頭をそっと撫でてくれることがあった。わたしはそのあと、眠りに落ちながら、枕に顔を埋めて、いつまでもその残り香をかいだものだった。そのふしぎな香りは、ほんとうに長いこと消えようとしなかった……

…(略)そして、折悪しく、わたしがオーデコロン[○]の匂いをさせたりしていると、父はたちまち顔をしかめて、小言を言うのだった。(新潮社版江川卓訳八三―八四)

これは大正の初期から計算して二十年後のことになるが、昭和八年五月、丸善では「匂ひの展覧会」なるものを開催し、各種の著名な香水製造会社の製品を陳列し、関係文書を展覧した。その時「匂ひの話」と云う菊判半截四八頁のパンフレットを発行したことがある。筆者は当時丸善社員中篤学の士として知られていた永島咲三が自ら調査した文献によって書き下したものであろうが、此種の紹介案内書としては山椒小粒^{さんしよ}の利き目が充分にある堂々たるものである。内容は前編・後編の二編に分れ、前編は「匂ひの沿革」、後編は「匂ひの話」と云うことになっている。適当に挿話も入れて読者をあかせない。筆者も余程自信を持っていたものか、巻末に「本文転載の場合は『丸善匂ひの話』による旨御附記の事」と但し書がついている。依而わたしもまた特有な匂いの知識は本書から得たと断っておく。

尚序でながら、「学鑑」明治四十年二月号に「化粧品鑑定法」なる一文が掲載されているので、その中の「香水」の項を左に転載しておく。

一、香気を長く保つものよし。

二、保存期の長からざるものよし。

三、アルコールの強きとて必ずしも悪からず。

冬期より夏期に於て需用者多く、又品物の腐敗し易き期節なれば、折角金を出して腐った水を買わぬ様に心

懸けねばならぬ。

三 明治の終焉

空砲一発。また一発。

大内山の森にこだまして漆黒の天空に消えて行く。時に大正元年九月十三日午後八時。明治天皇の靈輦発引の合図であった。

それから間もなく陸軍大将乃木希典のぎ されすけ自刃の報が、新聞社のデスクを驚かせた。希典は端座し、古式に典のつとり見事に腹をかき切っていた。前伏せにうつぶした姿は立派だったと云う。これはあとでわかったことであるが、妻の静子が、夫の姿を整えたものだと言う。そしてまた静子も天皇と夫の跡を追うて自殺した。

うつし世を神去りまし大君の

み跡したひて我は行くなり 希典

出でまして還ります日のならしときく

今日の御幸に逢ふぞ悲しき 静子

これは二人が遺した辞世であった。遺書が見付からないので原因は不明であったが、むかし希典が西南戦争に連隊長として参加した時連隊旗を奪われ、已にお詫びのため自害すべきであったものを、天皇の御慈悲によって罪が許されたことがあった。希典は終生これを徳として君命一途に奉仕して来たと云う。その上二子を日露戦争の時失



図 輪 壇
(天理参考館蔵)

が守られ、江戸幕府では寛文三年（一六六三）禁止を命じ、天和二年（一六八二）には武家法度の中に明文として規定し、明治政府もこれを踏襲して厳禁していた。故に如何に忠誠発露の結果であっても、殉死はあくまで避くべきであった。

乃木の自刃は世間に大きな話題を捲き起し、賛否両論が鼎の如く沸き立った。鹿島増蔵が「乃木大将自殺論」と云うパンフレットを書き、早稲田大学教授浮田和民も「大将自刃の効果」と云う一文を「やまと新聞」に寄せて、大将の場合には殉死すべきではないと強調している。代表的な意見として今左に摘記すると――

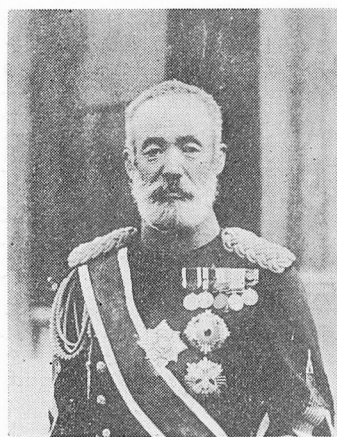
私は乃木大将の如き高潔なる人格を有し、誠忠類無き人物は長生きして居て貰って国家の柱石と崇めたかった。陛下の主臣として又、華胄子弟の教育家として生きて居て貰えばよかったのである。乃木大将の死は余りに悲劇すぎる模倣すべからざる行為である。日本の国民道德を進めるには左程効果はあるまいと思ふ。

文中「華胄子弟の教育家云々」は乃木が学習院院長であったことを指すものである。それは兎も角として浮田の

なったのも大きな痛手で、そうしたことから殉死をしたのだろうと云うのが一般の見方であった。殉死とは、上古王侯貴顕が死んだ時、その従者を生き埋めにした習慣があり、已に垂仁天皇のとき悪習としてこれを禁じ、野見宿禰^{のみのすくね}の進言に基づいて壇輪を以って代えた例がある。爾來殉死の禁

大將延命論は理路整然とした大局観で、大多数の人々がこれに同調したにも拘らず、一部の者から国賊扱いにされたのは笑止のいたりであった。尤も最近毎日芸術賞を貰った司馬遼太郎の「殉死」でさえ、人間像としての乃木をとらえその軍神説を否定し殉死に批判を加えている。

当時文壇に於いても乃木の殉死を賞揚するものと、それをけなすものとの二派があった。前者の代表的なものは森鷗外で、將軍殉死を報ずる号外の鈴の音を聞きながら、忽ち筆をとって「興津弥五右衛門の遺書」を書き、わずか五日間で脱稿して「中央公論」に寄せた。彼は權威そのものへの全き献身として此の事件をとらえ、武士道の觀念の表現、倫理的なものを把握せんとした。当時鷗外は軍医總監、陸軍省医務局長の要職にあり、たとえ武器は採らなくとも、軍籍にあった関係から乃木に対して同情的であった。一方志賀直哉は、その九月十四日の日記に「乃木さんが自殺したといふのを英子から聞いた時、馬鹿な奴だといふ氣が、丁度下女かなにかが無考へに何かした時



乃木大將

感ずる心持と同じやうな感じ方で感じられた」と言い、更に十五日の条に、「乃木さんの死は一つのテンブテーションに負けたのである」と断じている。学習院時代乃木の厳格な教育に反撥していた彼としては当然の云い分であったろう。まことに痛烈である。「殉死」の批判はこれ位にして先きに筆を進めよう。

ところで大正の初期一か月半程の間に新聞界を驚かした二大スクープがあった。

その一つは元号改正で、これをスクープしたのが「朝日新聞」の青年記者緒方竹虎であった。当時改元の年号が何に落ち付くかは一般の重大な関心事であった。一世一元の不文律が確定しているからは、年号も新時代を象徴し、日本将来の動向を指示するものでなければならなかったからである。そこで各社はその精鋭をくり出して、関係各方面に潜入させ探りを入れていたが一向に情報がつかめなかった。そうした折柄突然として無名の一青年記者が巧妙にこれをスクープしたのだから、各社はもとより、古強者の記者たちも啞然とした。然し緒方は偶然にこれを探知したのではなかった。彼は早くから枢密顧問官三浦梧棲に接近し、その信任を得、彼の口裏から察知した特ダネであったのである。

今一つの大きな特ダネは乃木大将の遺書のスクープである。これを探り当てたのは、「国民新聞」の座間止水であった。彼は乃木自刃の報を聞くや、単身乃木邸に出掛けた。そこには已に四、五名の警官が駆けつけ、現場保存の役に任じていた。座間は本庁の刑事を装い遺書の呈示を求めたところ、訳なく手に入れることが出来たので、素早くノートに写し取った。ところが運悪くその場に赤坂署長本堂平四郎が来合せた。本堂は古武士然とした警部で、その剛直は官界でも有名であった。その豪傑に見付かったのだからそのままでは納まりそうもない。座間は半ば観念したものの、折角取材した特ダネを手放すのはいかにも残念である。そこで唯単「お見逃しを」と哀願して見た。処が意外にも本堂は微笑をたたえ、「当方が承諾するまでは一切公開しないと約束するならノートは取り上げない。」と言明した。座間が直ちにその通り確約したのは勿論のことである。然るに山県・寺内の両長老は毛利家の四男を後継者として乃木家の再興を計っていた。乃木の遺書は必ず有り、絶家問題は必至であると一般に信じられ

ていたから、こうした山県・寺内の策動はいたく識者の反対を買い、遺書公開が迫られた。そこで渋々ながら二人は協議して絶家問題の項に白紙を貼って関係者に提示した。この事を知った本堂署長は、非常に激昂し、座間を呼びつけて「遺書が発表された時に公開してよい」と指示した。

座間は本堂との確約を守り、徳富社長にも話していなかったが、此の時始めて真相を語ったので、「国民新聞」は逸早く号外を刷り、手ぐすね引いて公開の時期を待っていたのである。かくして「国民新聞」が他社に魁て遺書公表の殊勲を立てたのであった。

さて此の項は、丸善社史とは直接関係がない話であるが、丸善が明治から大正にかけて歩んでいた時、その背景となった時代は、こうした幾多の事件がいくつか積み重なり合って大きな変動が徐々に起って行ったのである。そして丸善もまた日本文化の一翼を荷いながら、日本国家構成の一要素として、陰に陽に大きく貢献していったのであった。従ってこうした挿話を取り上げるのも、あながち徒爾ではないと思う。